

確かに神の栄光になる24時祈り

(コリント人への手紙 第一 10章 31節)

「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」

1. 私たちのすべての選択と決断は、「神の栄光のために」でなければならない。

1) 弱者の為の配慮が神の栄光?

コリント人への第一の手紙の中で、パウロはその具体的な例を通して、伝道と宣教の益となるのであれば、自分の自由行使する権利さえも喜んで手放すべきだと教えている。

例) 偶像にささげられた肉であっても、感謝して食べるならば何の問題もない。しかし、その場にその行為を良心の上でつまずきと感じる兄弟がいるならば、その人の良心のために食べない方が、より神の栄光となる道である。

2) 信仰の前進と成長のための鞭が神の栄光?

ところが、こう言う人もいるだろう。

「いつまで信仰の弱い者たちに配慮し続けるのか? むしろ彼らを弱さから脱皮させて、より大きな神の栄光を現すようにすべきではないか?」と。

例) イエスはパリサイ人や律法学者たちの前で罪人たちと共に食事をし、安息日に病を癒され、律法の真の意図と神の漸進的な啓示を示された。

2. 「神の栄光のために」という名目下で行われる自己中心の正当化、合理化

1) 神の栄光の判別基準の曖昧さ

☞ 現在の自分の理屈や視点に従って、自らの行動や選択を正当化し、合理化してしまう危険

2) 始まりの不平等さー傾いているグラウンド

☞ 業や実が神の栄光になるなら選択肢のなかった背景や状況の違いは神の差別?

3) 信仰の成長段階によって、同じ御言葉を聞いても、神の栄光のために異なる選択や決断が生まれる。

☞ その違いは善惡の問題ではなく、神が各人を導いておられる成熟への旅路、時刻表の違い。

3. 如何なる時にも、間違のなく神の栄光を現わす 24 時祈り

1) 今ここでの神の栄光

被造物である私たちが、「今、ここで」創造主なる神の言葉に聞き従うことによって、神は栄光を受ける

2) 毎日変わる(成長する)私によって現れる、変わらない神の栄光

私たちの思いは、常に聖霊の導きの中で変えられ、成長していかなければならない。

聖霊の導きと神の思いは、いつも私たちの理解をはるかに超えているからである。

3) いつでもどこでも神の栄光を現わせる祈り

ゆえに、「神の栄光のため」とは、何をどのように行うかという行動そのものの問題ではなく、その選択と決断を下す過程において、神に祈り続け、聖霊の導きを求め、その導きを恐れずに受け入れ、挑戦する信仰の姿勢にかかっている。

「神の栄光のために」という私たちの選択と決断は、闇に覆われているこの世にあって体をもって生きている故、いつも部分的で一時的であり、不完全なものでしかない。

しかし、それらすべてを神に委ね、神の導きを求め続ける祈りの姿勢は、完全であり、永遠であり、明確な神の栄光を現わすことである。